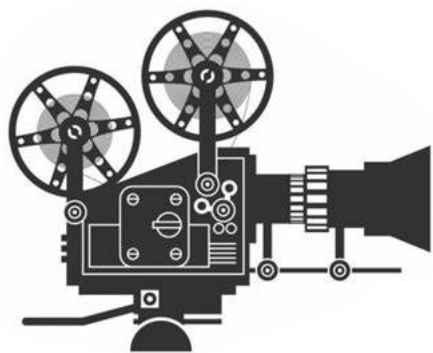




いにしへの映画つれづれ ②⑥ 集団刑事物の開祖「87分署」

千葉豹一郎

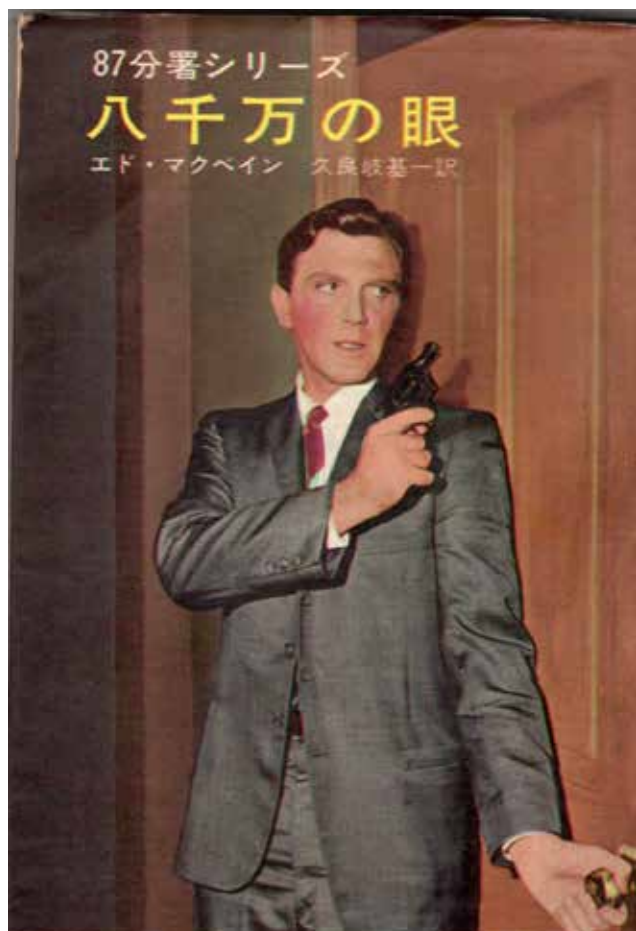
名匠黒澤明の「天国と地獄」(63)。同年に起きた吉展ちゃん誘拐事件の犯人小原保が、この映画の予告編を観て犯行を思いついたと告白した。同時期に誘拐事件が多発したこともあって国会でも取り上げられ、刑法の営利誘拐罪に身代金目的略取等が追加されより重罰が課される契機となった。

この「天国と地獄」の原作は、エド・マクベインの「87分署」シリーズの「キングの身代金」だった。狙った子供ではない子が間違えて誘拐されるというシチュエーションは、その後も時代劇も含めてたびたび使われている。「87分署」シリーズは、ニューヨークと思しき架空の都市アイソラの「87分署」を舞台に、そこに勤務する刑事たちを等身大

の人間として生き生きと描いた警察小説の傑作として名高い。1956年に発表された第1作の「警官嫌い」が大きな反響を呼び、以後マクベインは亡くなる2005年まで計56作を半世紀に渡って書き続けた。世界中に多くの読者を持ち、日本では87分署に特化した研究本も何冊か出版されている。87分署が画期的だったのは、本筋の事件のおもしろさや警察活動の詳細な描写にくわえ、何より刑事たちの私生活や家族にも力点を置いたことだった。小説、映画、テレビで主人公となる刑事たちは優れた能力と行動力を持ち、私生活も犠牲にして捜査に邁進するケースが多い。しかし、刑事として普通の人間。やや特殊な職業ではあっても、私生活があり家庭があ

る。87分署に登場する刑事たちには、誰一人スーパー刑事も名刑事もおらず、刑事をサラリーマン、公僕として描いたのだ。

マクベインはエヴァン・ハンター名義でも活動していて、本欄②でも紹介した「暴力教室」(55)の原作で注目され、「逢う時はいつも他人」(60)やヒッチコックの「鳥」(63)の脚本も手がけ、映像の世界とも縁が深い。87分署も当初から映像化を考えていたようにも思われ、早速日本では短縮版で公開された「第87警察」(58)と「麻薬密売人」(60)、未輸入の「The Mugger」(58)に映画化された。日本では、「天国と地獄」の翌年に同じ東宝で加山雄三主演の「恐怖の時間」(64)、やはり東宝で市川崑監督、水谷豊主演の「幸



「八千万の眼」の原作本(早川書房刊)。表紙はキャレラ刑事。



「八千万の眼」の裏面。左からマイヤー、ハヴィランド、キャレラ、クリングの87分署の面々(写真下)。

福」(81)、テレビでも火曜日の女シリーズの「木の葉の舟」、古谷一行主演の「87 分署シリーズ・裸の街」、火曜サスペンス劇場で渡辺謙主演の「わが町」などがある。これらの中で舞台を東京の月島に置き換えた「わが町」は好評で、何度もリピートされている。ビデオ撮影が主流となりつつあった中でのフィルム撮影で10本が制作され、原作の持ち味をよく活かしてドラマを観た来日中のマクベインも満足だったという。

この他にも、人気ドラマ「太陽にほえろ」でも2話分にエピソードが使われている。

本国ではバート・レイノルズ主演の「複数犯罪」(72)、フランスでジャン・ルイ・トランティニアン主演の「刑事キャレラ 10 + 1 の追撃」(72)ドナルド・サザーランド主演の「刑事キャレラ 血の絆」(77 未)、「刑事コロンボ」の「ジグソー」と「初夜に消えた花嫁」などがある。

このように、本国より日本での映像化が圧倒的に多いという逆転現象が起きていて、決

定打に欠けるようにも見える。しかし、これがちゃんとあるのだ! 「警官嫌い」が発表された5年後にテレビ化された、その名もズバリの「87 分署」である。

テレビ草創期の捜査物は「ハイウェイ・パトロール」「シカゴ特捜隊M」「タイトロープ」など、無敵の主人公たちがほぼ単独で活躍するものが多かった。これらは30分枠だったので、そうしたスタイルが適していたが、1950年代の後半くらいからワイド版と呼ばれた60分枠が主流となり、主役が1人では間延びして最後まで持たせることが難しくなってきた。窮地に陥ると背中に隠し持った拳銃で危機を脱する覆面捜査官役で一躍脚光を浴びた「タイトロープ」のマイケル・コナースは、人気番組にもかかわらず60分枠への拡大と複数主演を持ちかけられたこともあって降板し、わずか37本で打ち切られた。しかし、そうした流れは変えられず、「サンセット77」などのように複数主演の番組が増えていった。そんな中で、数人の刑事

たちが交錯する「87 分署」は格好の題材だった。テレビの初期にも平凡な刑事の地道な捜査活動を描いて長寿番組となった「ドラグネット」のようなドラマもあった。ロス市警の事件ファイルを基に構成され、ナレーションで締めくくる実録スタイルはひとつの定番となり、後の「FBI アメリカ連邦警察」などに踏襲されたている。「ドラグネット」では2人の刑事が主人公だったが、30分枠だったこともあり私生活などはまったく描かれていなかった。さらに、ご両人があまりに事務的でパロディにもまれ、「ドラグネット 正直一直線」(87)に映画化もされているほどだ。被害者などに対する態度もドライというか同情のかけらもなく、あまり感心できずおもしろ味にも欠けた。こうした刑事像はウェットな日本人には受けず、草創期に一部が放送されたのみだった1967年に再開されたカラー版の新シリーズも未放映に終わり、パイロット版が「ロサンゼルス捜査網」の邦題で映画枠に登場しただけだった。こう



「複数犯罪」のパンフ。キャレラ役のバート・レイノルズ(右)は実父が警察署長だった!



名優ジャン・ルイ・トランティニアンがキャレラに扮した「刑事キャレラ 10+1 の追撃」。

いにしえの映画つれづれ

した中で、集団刑事物の「87分署」の登場は時代の要請といっても過言ではなかった。

ニューヨークを舞台に、スティーブ・キャレラ（ロバート・ランシング 声 西村晃）、ユダヤ系のマイヤー・マイヤー（ノーマン・フェル 声 藤岡琢也 → 早野寿郎）、若手のバート・クリング（ロン・ハーパー 声 石原良）、中年のロジャー・ハヴィランド（グレゴリー・ウォルコット 声 宮部昭夫）の個性豊かな4人の刑事たちが、愚痴やジョークを交わしながら、地道に捜査を重ねて事件を解決していく。この他に、キャレラの妻で聾啞のティ（ジーナ・ローランズ）やマイヤーの妻サラ（ルース・ストーレイズ）などが何度か登場した。

「キングの身代金」をはじめ「警官嫌い」「レディ・キラー」「電話魔」「クレアが死んでいる」などが使われ、マクベイン自身もエヴァン・ハンター名義でキャラクターや何本かの脚本や原案も担当している。それだけに、

主役のキャレラをはじめとする原作の登場人物のキャラクターが際立ち、刑事部屋の雰囲気もよく体現されていた。ただ、原作では問題刑事のハヴィランドのキャラクターがテレビ向けに薄められており、原作とは異なる脚色や、原作もまだ十数本しかなかったためオリジナルや他から借用するなどの苦心があったようだ。しかし、事件の大筋を追いながら刑事たちのリアルな捜査活動や私生活という87分署の定型がしっかり押さえられ、キャレラと聾啞の妻との愛情あふれるやり取りには心温まるものがあった。子だくさんのマイヤーのにぎやかな家庭もよく出てきた。休暇で子供たちに振り回され、うんざりして戻ってきたマイヤーが子供にせがまれたアイスクリーム屋が売り惜しんだことから、偶然事件の糸口をつかんで逮捕するエピソードもあった。このときの犯人役は、後に「0011 ナポレオン・ソロ」でブレークするロバート・ヴォーン（声は矢島正明

ではなく若山弦蔵！だった）で、他にもデニス・ホッパー、ピーター・フォーク、ロバート・カルプなどがゲスト出演した。主役のキャレラ役のロバート・ランシングは彫の深いギリシャ彫刻のようなマスクで、イタリア系のキャレラらしくないとの意見もあったが、「麻薬密売人」でもキャレラを演じておむね好評だった。ドラマに触発されて原作を読み始めたら、イメージにピッタリで適役だと思った。その後の映画化やドラマを見ても、どうしてもランシングが思い浮かぶほどだった。マイヤーら他の刑事たちも同様で、キャスティングの点でも成功したといえるだろう。後の「ヒルストリート・ブルース」などや、日本でも「七人の刑事」「特別機動捜査隊」「太陽にほえろ！」など今に至る集団刑事ドラマの原型のひとつとなり、さらには時代劇の「江戸の旋風」や「八丁堀捕り物ばなし」などもこの系譜に属する。

こうした出来の良さから原作のファンの



「クレアが死んでいる」を大幅に脚色した「幸福」では水谷豊がキャレラ、クリングを永島敏行が演じた。



「天国と地獄」のパンフ。

みならず、地味ながら多くの熱心な支持を得たが、1シーズン30本ほどで惜しまれつつ打ち切られてしまった。前述のような事情から、ドラマの質を維持しながら続けていくのが難しかったのだろう。短命には終わったが、出演者たちそれぞれにも出世作となった。

ランシングは舞台やアナウンサーを経て、SFの「4D マン」(59)に主演するもほぼ無名だったが、「87 分署」で注目され「頭上の敵機」(ギャラ問題で、戦死の形で途中降板)やスパイ・サスペンスの「過去のない男」の2本のシリーズに主演し、「ボナンザ」をはじめ多くの人気シリーズにもゲスト出演。テレビ界の売れっ子となり、映画でも主演作の「殺人鯨ナム」(66)「目には目を」(66 未)の他「傷だらけの挽歌」(71)にも私立探偵役で出演した。俳優になる前は陸軍に在籍し、大阪にも駐在していた。

マイヤー役のノーマン・フェルは実際にユダヤ系で、「12 人の怒れる男」(57)のオリジナルのテレビ版の陪審員1 番や、「勝利なき戦い」(59)「オーシャンと十一人の仲間」(60)などに脇役として出演。あまり目立たなかったがマイヤー役以降は、テレビのゲストや「ブリット」(68)の警察署長、レギュラー出演したバート・レイノルズの「警部ダン・オーガスト」などで刑事を多く演じた。しかし、コメディ・ドラマ「スリーズ・カンパニー」(日本未放映)のとぼけた管理人役が大好評で、78 年度のゴールデングローブ賞の助演賞を受賞し、「こんなことなら、貧乏刑事なんて早く辞めてりゃよかった」とユーモアを交えて喜びをあらわにした。

若手のクリング刑事役のロン・ハーバーも、テレビの「特攻ギャリソン・ゴリラ」の主演やテレビ版の「猿の惑星」にレギュラー出演した。中国からファンレターが来るので不思議に思っていたら、「特攻〜」がアメリカのドラマとしては同国で初めて放映されていたという。

ハヴィランド刑事役のグレゴリー・ウォルコットは陸軍を除隊後、いかつい体軀を活か

して「ミスタア・ロバーツ」(55)「マッコネル物語」(55)などの軍隊物に小さな役で出演し、「87 分署」以降は次第に大きな役を演じるようになり快作「ブラックエース」(72)や友人のクリント・イーストウッドの「シノーラ」(72)「サンダーボルト」(74)「アイガーサンクション」(75)「ダーティファイター」(78)などに出演した。史上最低の監督「エド・ウッド」(94)の「プラン9 フロム・アウトースペース」(59)の主演でよく知られるが、同作への出演をずっと後悔していたという。しかし、後年は人々の記憶に残ることとは悪くないと思うと述べ、「エド・ウッド」へのカメオ出演も快諾した。

一番の出世頭はキャレラの聾啞の妻ディ役のジーナ・ローランズである。

54 年に俳優、監督のジョン・カサベスと結婚。その後、舞台で成功を収めて映画に出演し始め、多くの有名番組にもゲスト出演した。元々実力はあったが、セリフのない「87 分署」の難役を見事にこなして大きく注目された(日本でも「裸の街」の坂口良子、「わが町」の有森也実がそれぞれ好演した)。その後は「愛の奇跡」(63)などに出演し、夫の「こわれゆく女」(74)と“女子連れ狼”を好演した「グロリア」(80)でアカデミー主演賞にノミネートされた他、多くの賞で受賞とノミネートをされている。息子ニックが監督した晩年の「きみに読む物語」(04)の認知症を患った女性は忘れ難い。

日本では最近世間を騒がせているフジテレビで、日曜の夜9 時45 分から放映されていた。フジの開局は昭和34 年の3 月1 日。昭和28 年2 月のNHK、8 か月遅れの日テレ、30 年4 月のTBS、34 年2 月のNET に1 か月の差で一番後発だった。そのため、出遅れた分を取り戻すべく、その存在を知らしめ視聴者をつかもうと必死だった。開局記念番組の時代劇「天馬天平」に3 万人の中から選んだ高校生に富士八郎(歌手の倉木麻衣の実父)なる芸名を付けたりもしていた。外画ドラマも「第8 救助隊」など8 の付くものにこだわっていた(TBS も「サンセット77」

に次いで兄弟編の「サーフサイド6」を放映していた)。「87 分署」もその一環で獲得されたといわれ、やや遅い時間にもかかわらず幅広い層に支持されていた。地元の書店の老女将も、原作の「八千万の眼」を買った際に、表紙を見て「西村晃(2 代目の黄門様)の声色でやってたね」と言って観ていたらしい。周囲にもファンが何人かいて、それなりの人気はあったものの、本国で終わってしまったはいかんともし難かった。その後、昭和42 年の夏休みの深夜にフジで毎夜リピートされ、昭和44 年から45 年にかけて12 チャンネルで土曜の午後にリピートされたが、途中で終わってしまった。以後、キー局でのリピートは途絶えている。再度のリピートを待ち望んでいるコアなファンも多いが、残念ながら今のところ絶望的だ。外画ドラマの場合、古いものほど権利関係をクリアするのが難しいうえ、映画と違って本数が多いため、時間枠の確保もネックとなる。当時の日本語版が行方不明などで現存しないことも多く、余計リピートを難しくしている。字幕でもいいから、リピートは無理でもソフト化はぜひとも願いたいところだ。

87 分署 1961 ~ 62 モノクロ 60 分
87h Precinct
ハベル・ロビンソン・プロダクション
出 演
ロバート・ランシング
ノーマン・フェル
ロン・ハーバー
グレゴリー・ウォルコット
ジーナ・ローランズ

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30 年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。